

2 コラム RAMPWAY
泉 麻人

特集 企業とCSV

5 基本は持続的成長
首都高速道路株式会社 初代表取締役会長
長谷川康司

9 経営戦略としてのCSV
事業構想大学院大学 教授
小早川 護

13 CHALLENGE
見えないものを見る力
—インフラドクター篇—

14 Taste of the Season
森下典子

16 首都高HEADLINE

18 business essay
人の「利他性」について考える
京都大学大学院 医学研究科 精神医学 教授
村井俊哉

20 つくる人まもる人
一般財団法人首都高速道路技術センター
八崎弘昌

22 高速百景 中野正貴

cover photo by Minoru Saito
contents produced by
Metropolitan Expressway Company Limited



illustration by Takao Nakagawa

column | RAMPWAY 23

首都高名所案内
飯倉附近・
東京タワーの
見える場所

コラムニスト
泉 麻人

この季節の夕暮れどき、首都高の都心環状線を気ままにドライブしながら夜景を眺めたくなる。とくに浜崎橋から谷町にかけてのあたり、ライトアップされた東京タワーの景色は魅惑的だ。かつて、その電飾はほぼオレンジ色に決まっていたけれど、近頃は、様々な色合いのタワーを望むことができる。最寄りの出口・飯倉あたりで降りて、

適当なコインパーキングなんかには車を駐めて界隈を散策するのもおもしろい。飯倉片町交差点裏の麻布台3丁目の路地に入りこむと、俗に「スペイン村」とあだ名される昭和初期建築の洋館アパート（和朗フラット）がまだ健在だし、その奥の山谷を上り下りする植木坂、鼠坂、狸穴坂などの坂道は名前からしてそそられる。おそらく、ほ

んのひと昔まで野ネズミやタヌキが出たような場所だったに違いない。先のスペイン村のアパートが建つちよっと前頃、昭和2年当時の東京を時の流行作家たちが散歩して書いた「大東京繁昌記」という随筆集がある。そのなかで島崎藤村が居住していたこのあたりの景観を「飯倉附近」と題して描写している。

背の低い民家が何軒か寄り集まっている。六本木方面へ行っても、虎ノ門方面へ進んでも、坂を上げれば台地があつて、仙石山とか城山とか、古い土地に根づいた山の名が高級マンションやインテリジェントビルの名に残されていたりする。そんな、ふと紛れこんだ崖際の一角に東京タワーの絶景ポイントを発見することもある。

「この附近には新開の町などにはないような特色の深い小路もある。飯倉二丁目の裏手に隠れている路次、飯倉三丁目にある熊野神社の近くから旧天文台の方へ登ろうとする細い坂になった小路などは、私の好きなおとこだ。旧稲葉邸の角から我善坊の方へ通う静かな横町も悪くない」

さて、このあたりにくるともう一人、重要な文豪のことを思い浮かべる。趣味の散歩人の元祖ともいえる永井荷風だ。偏奇館と名づけられた荷風の住み処が存在したのは麻布市兵衛町の崖地。現在の六本木一丁目、泉ガーデンという職住融合モールが建っている一角という。荷風がここに暮らしたのは大正9年から昭和の戦中まで。空襲で焼かれて、戦後は市川に引越してしまつた。昭和34年の春まで生きた人だから、ずっとこっちにいたら前年

頃の地図ならば一致する。天文台はかつてロシア大使館裏の崖上にあり、その後現在の調布に移転した。まあそれほど視界の開けた、環境の良い場所だったということだろう。稲葉邸の所在地は麻布郵便局並びのロシア大使館の対面あたり。いままも八幡神社の裏手へ下る路地が続いていて、入っていくと我善坊と呼ばれた窪地に行きあた

きた東京タワーについての何らかの言及が日記に見られたかもしれない。

る。周囲を台地に取り囲まれたこの一帯、再開発が進みつつあるようだが、

いずみ あさと / 1956年、東京都新宿区生まれ。慶應義塾大学商学部卒業。79年、東京ニュース通信社に入社。『週刊TVガイド』などの編集者を経て、フリーのコラムニスト。近著に『大東京23区散歩』（講談社）がある。